

ラオス中部農山村における食料としての野生動植物の利用実態 Utilization of wildlife as foodstuffs in rural areas of central Laos

○羽佐田 勝美 * スニー ポンドゥアンシィ **

Katsumi Hasada, Souny Phomdouangsy

1. はじめに

ラオスの農村では、水稻や陸稲による自給的な農業が営まれる一方、野生動植物も活発に採集・利用されており、農家の生計に寄与している。工芸の材料や薬などとして販売され、家計の収入源となっている野生動植物もあるが、ほとんどは自給用の食料として利用されている。しかし、採集以外の方法から入手した食材と比較し、世帯が野生動植物の食材にどれほど依存しているかを評価した報告は少ない。そこで本研究では、農家の食事調査を実施し、利用された食材とその入手方法を明らかにし、野生動植物の食材の依存度を明らかにした。また、主に水稻栽培を実施する農家（以下、「水田農家」とする。）と焼畑陸稲栽培のみを実施する農家（以下、「焼畑農家」とする。）の間での依存度の違いと依存する野生動植物の種類の違いを考察した。

2. 調査対象地及び調査方法

調査対象地は、ラオス中部のビエンチャン県ファン郡N村である。N村は低地水田、川やため池などの水辺、村近縁の丘陵地、森林で構成され、これらの空間から野生動植物が採集されている。2013年現在、ラオ族47世帯とカム族86世帯の計133世帯、人口698人で構成され、主要な生業は低地水田における水稻栽培と丘陵地や森林における焼畑陸稲栽培である。低地水田は約80haと面積が限られており、また、移住政策による人口増加のため、昨今では丘陵地や森林における焼畑陸稲栽培が盛んである。焼畑地では、陸稲に加え、換金作物であるハトムギ栽培もここ数年で盛んになってきている。主食以外の農作物として、果菜、葉菜、葉茎菜、香味野菜や香辛野菜などがホームガーデンで栽培されている。畜産については、牛や豚を飼育する世帯は限られており、多くの世帯では家禽（ニワトリとアヒル）のみ飼育されている。その他に、ため池を所有して自給用の魚の養殖をしている世帯もあるが数世帯にとどまる。

水田農家と焼畑農家から、それぞれ平均的な耕作面積を持ち、かつ、平均的な家族構成の世帯を4世帯ずつ抽出し、計8世帯の農家に対し食事調査を実施した。調査方法は記帳と写真撮影とし、記帳は対象世帯が調理した料理について、朝昼夕それぞれの食事の料理名、利用した食材とその入手方法を、写真撮影は料理と食材を各世帯に記録してもらった。記録されたデータを週1~2回確認した。調査期間は2014年9月1日から9月30日の1ヶ月間（雨季）とした。

3. 調査結果及び考察

* 国際農林水産業研究センター（Japan International Research Center for Agricultural Sciences）

** ラオス国立農林研究所農林業政策研究センター（Agriculture and Forestry Policy Research Centre, National Agricultural Forestry Research Institute）

キーワード：野生動植物、食材、採集、水田農家、焼畑農家

調査期間中、8世帯全体で1404品の料理、4051品の食材の利用が確認された。主食のコメや麺、調味料、油脂、香味野菜や香辛野菜を除いた906品の食材うち、食材の種類として、魚、豚肉、鶏肉、ネズミ、カエル、コオロギなどの動物性食材と、タケノコ、クワレシダ、セイヨウカラシナ、カボチャ、ヘチマ、パパイヤなどの植物性食材が確認された。また、食材の入手方法として、採集、購入、贈与、生産（栽培、飼育など）が確認された。

食材別、農家タイプ別、入手方法別に食材の利用頻度とその割合を表1に示した。調査した8世帯全体では、食材全体の45%を採集により入手しており、他の入手方法と比較し、相対的に高い依存度であった。農家タイプ別に見ても、水田農家49%、焼畑農家39%と野生動植物への依存度は相対的に高かった。食材別の利用頻度の割合を農家タイプ別に見てみると、植物性食材は39%とどちらの農家タイプも同じであったが、動物性食材は焼畑農家38%に比べ、水田農家62%と利用頻度の割合が高かった。

食材の種類別利用頻度の割合を農家タイプ別に表したのが図1及び図2である。動物性食材について、水田農家の採集のうち約8割が魚介類（主に、魚）で占められていた。一方、焼畑農家の採集のうち約5割が哺乳類（主に、ネズミ）で占められていた（図1）。植物性食材については、水田農家、焼畑農家とも、採集の約8割が葉菜・葉茎菜とタケノコで占められていた（図2）。

4. まとめ

利用される食材について、他の入手方法と比較すると、全体として採集される動物性及び植物性食材への依存度が相対的に高かった。農家タイプ別に見ても、同様の傾向が見られた。水田農家は採集される動物性食材として魚介類の割合が高かった。主な生業の場が水田であることが、魚介類をよく採集することと関係していると考えられる。焼畑農家は採集される動物性食材として哺乳類の割合が高かった。主な生業の場が焼畑地であることが、哺乳類をよく採集することと関係していると考えられる。一方、採集される植物性食材については、どちらのタイプの農家も葉菜・葉茎菜とタケノコの割合が高かった。このことから、採集される動物性食材の種類は農家の生業の場と関係が深く、一方、採集される植物性食材の種類は農家の生業の場とあまり関係がないと考えられる。

表1 食材別、農家タイプ別、入手方法別食材利用頻度及びその割合

Table 1 Use frequency and its ratio based on foodstuffs, farm household types and ways of obtaining

| 農家タイプ | 食材 | 採集 % | 購入 % | 贈与 % | 生産 % | 計 % |
|-------|-------|---------|---------|---------|---------|----------|
| 水田農家 | 動物性食材 | 147 62% | 57 24% | 23 10% | 12 5% | 239 100% |
| | 植物性食材 | 120 39% | 7 2% | 47 15% | 131 43% | 305 100% |
| 計 | | 267 49% | 64 12% | 70 13% | 143 26% | 544 100% |
| 焼畑農家 | 動物性食材 | 44 38% | 46 40% | 18 16% | 7 6% | 115 100% |
| | 植物性食材 | 97 39% | 12 5% | 19 8% | 119 48% | 247 100% |
| 計 | | 141 39% | 58 16% | 37 10% | 126 35% | 362 100% |
| 全農家 | 全食材 | 408 45% | 122 13% | 107 12% | 269 30% | 906 100% |

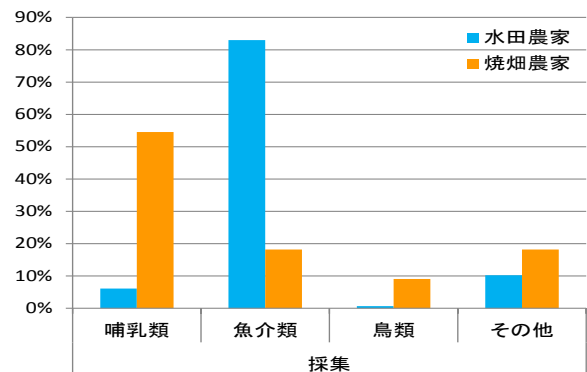


図1 農家タイプ別、動物性食材種類別、利用頻度割合
Fig.1 Ratio of use frequency of animal foodstuffs based on kinds by each farm household type

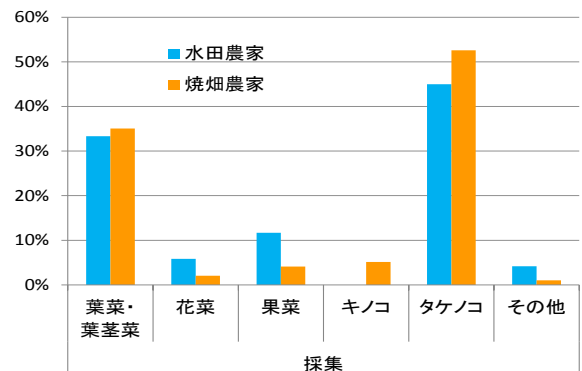


図2 農家タイプ別、植物性食材種類別、利用頻度割合
Fig.2 Ratio of use frequency of vegetable foodstuffs based on kinds by each farm household type